

# 現代社会における一神教と旧約聖書

西 満

## 1 問題提起

9・11の同時多発テロ以後、アメリカがアフガニスタン、イラクで戦争を始めたことを通して、一神教に対する風当たりが強くなってきている。それに関する多くの書籍や論説も記されている<sup>(1)</sup>。「文明の衝突」が「宗教の衝突」<sup>(2)</sup>とも言われるようになり、特に戦争を正当化したり、戦争に参加する人々を鼓舞するために旧約聖書が用いられることが、日本人に一神教への疑念を感じさせる理由の一つともなっている<sup>(3)</sup>。このような一神教に対する不信感はいくつかの書籍、新聞の紙面に表されているが、その一例を2003年の朝日元旦社説に見ることができる。イラク戦争突入が不可避という状況の中で、朝日新聞は元旦社説の最後の部分で次のように記している。

- 
- (1) 例えば、橋爪大三郎、島田裕己『日本人は宗教と戦争をどう考えているか』朝日新聞社、2002年。三浦俊章『ブッシュのアメリカ』朝日新聞社、2003年など。
  - (2) 栗林輝夫『ブッシュの「神」と「神の国」アメリカ』（日本キリスト教団出版局、2003年）50～53頁。
  - (3) 山折哲雄は、米国同時多発テロが起きた時、ブッシュ大統領は旧約聖書からダビデの言葉をもって締めくくり米国民に励ましのことばを与えたこと、湾岸戦争の時にも、多国籍軍の兵士の胸ポケットに旧約聖書のことばがあったことに言及する。さらに中東におけるイスラエル対パレスチナの際限のない紛争を取り上げ、平和に対する一神教の今日的役割に対して否定的な言葉を投げかけている。朝日新聞（2003年8月6日）25頁。

「文明の対立」が語られている。背後にあるのはイスラム、ユダヤ、キリスト教など、神の絶対性を前提とする一神教の対立だ。「金王朝」をあがめる北朝鮮もまた、一神教に近い。いま世界に必要なのは、すべての森や山には神が宿るという原初的な多神教の思想である。そう唱えているのは、哲学者の梅原猛さんだ。古来、多神教の歴史をもつ日本人は、明治以後、いわば一神教の国をつくろうとして悲劇を招いた。そんな苦い過去も教訓にして、日本こそ新たな「八百万の神」の精神を発揮すべきではないか。厳しい国際環境はしっかりと見据える。同時に、複眼的な冷静さと柔軟さを忘れない。危機の年にあたり、私たちが心すべきことはそれである。

『千と千尋』の精神で——年の初めに考える」という表題の社説の前半は、間もなく始まるであろうイラク戦争と、戦争に突き進もうとしているブッシュ政権に対する不安材料について記している。その不安は的中し、イラク戦争が終わった現在、現実的な問題となって世界に突きつけられている。社説の前半については、細かい点はともかくとして全体としては同感である。しかし、上述した末尾の部分については、一神教への反感をあらわにし、前半の文章から比べると問題を感じさせる内容である。朝日新聞は、日本の有識者の中に多くの購読者（800万前後あるといわれる）を持つ巨大メディアである。それだけに日本人の思考に対する影響力は大きい<sup>(4)</sup>。その大新聞が、このような論説を、元旦の大切な社説の中で論じていることで、不安な思いに駆られたのは筆者だけだろうか。世の中が次第に聖書の神への信仰を否定し、日本古来の八百万の神への信仰を美化し、人々をその方向へと誘導する役割を、従来どちらかという左翼的<sup>(5)</sup>と思われていた大新聞が行なおうとしているの

(4) 2003年大学入試での朝日新聞からの出題は239大学で、他の全国紙、Y紙(50)、M紙(54)からの出題数に比べて4倍以上である。このことを通しても朝日のもつ影響力の大きさを知ることができる。また、『千と千尋』の精神で」からは6問出題されている。『朝日PR版』(03年6月10日号)。

だろうか。これはキリスト者として見過ごしにはならない事柄と思うので、この社説に対して少しばかり論及してみたい<sup>6)</sup>。(これはあくまで一例として取り上げるのであって、朝日新聞を攻撃しているわけではない。筆者は朝日の愛読者である。)

なおこの小論で取り扱うのは、主に上記の文章とその関連についてだけであり、それも旧約聖書を学ぶ一学徒としての立場からの考察である<sup>7)</sup>。また朝日の社説への批判だけではなく、その背景にある思想についても論述する。また第3「戦争と旧約聖書」の項では、従来のキリスト教世界の解釈の問題点も論述したい。間違った解釈が、多くの誤解を呼ぶ原因ともなっているからである。

## 2 朝日新聞の2003年元旦社説に見られる一神教観

この社説の論調は、一神教に対する誤解と偏見が基調になっているように思われる。東京大学出版会から発行された『宗教学辞典』をあえて用いれば、一神教 (monotheism) の定義とその神観は次のようなもの

- 
- (5) かつて朝日の記者であった稲垣武は、「朝日新聞の強烈なイデオロギー的体質の表れとして、その歴史を振り返ってみるならば親共産主義と反米体質が浮き彫りになる」と言う。古森義久他著『朝日新聞大研究』(扶桑社、2002年) 26頁。しかし、朝日は何度も編集方針を変更した。戦前・戦中は軍部追従、戦後は親米路線、中国、北朝鮮に関する偏重報道 (親共産主義) など。佐々克明『病める巨象』文芸春秋、昭和58年。
- (6) 明治初年に欧米に派遣された岩倉使節団は、「死囚十字架より下がる凶絵」を「奇怪」とし、聖書を「瘋癲の戯言」とキリスト教に拒否感を抱いた。阿部志郎 (東京女子大学理事長) はこのキリスト教のイメージは今日まで影響を与えているという。阿部志郎他『新しい社会福祉と理念』(中央法規、2001年) 序文。
- (7) 朝日2003年元旦社説に関する別の立場からの批判については、古森義久『国の壊れる音を聴け—国際報道と日本の歩み—』(恒文社、2003年) 298~324頁参照。朝日新聞に関する批判的な書は比較的多く発刊されている。佐々克明『病める巨象』、稲垣武『「悪魔祓い」のミレニウム』文芸春秋、2000年、稲垣武『朝日新聞血風録』文芸春秋文庫。上記3冊はいずれも元朝日新聞記者による著述である。藤原肇『夜明け前の朝日』鹿砦社、2001年。藤原は、朝日を批判しつつも、朝日を評価し、朝日抜きにしては日本のジャーナリズムは語れない、朝日がしっかりしなければ、とエールを送る。『前掲書』8頁、230頁参照。

である。

ある一神が、世界における唯一至上の神として立てられ、信仰されている宗教体系をいう<sup>(8)</sup>。

神は唯一の存在であって、万有の創造者である。神は被造物である人間とは本質において相違する。一切の存在は、神によって支配され、支えられ、その計画の中におかれる。神は時間を越えて永遠に生きるものであり、すべての権能を身に備えて、すべての場所に臨む。このように超越的な神であるが、人間の心を理解し、人間に働きかける人格的存在とみなされ、世界の最高原理としての哲学的な「一者」とは異なる<sup>(9)</sup>。

上記の神概念は旧約聖書に深く依拠している<sup>(10)</sup>。そしてこの神概念が、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の中心的な教理となっている。それは社説氏も指摘するとおりである。

しかし社説がいう「金王朝をあがめる北朝鮮もまた、一神教に近い」という表現は、上記一神教の定義からかけ離れたものであり、よしそれが文学的な言葉のあやであり、金日成を「永遠の主席」として崇め、神格化したとしても、その表現は適切ではない。どのような意味において

---

(8) 小口偉一、堀一郎監修『宗教学辞典』(東京大学出版会、1974年) 27頁。

(9) 前掲書、同頁。ヘブライ大学のツヴィ・ヴェルロウスキ(比較宗教学)は次のように言う。「一神教が意味するところは、神は単に数の上で唯一であるだけでなく、絶対的に唯一であり、世界を創造したという点で他の何者にも本質的に異なっている、ということです。このような唯一の神という観念によると、創造者と被造物、あるいは神と世界との間にはいかなる連続性もありません。人間は、被造物であって、神や仏ではありません。」ヴェルロウスキ「ユダヤ教とは何か—普遍主義と特殊主義と」宮本久雄、大貫隆編『一神教文明からの問いかけ』(講談社、2003年) 62~63頁。

(10) 唯一性(申命6:4, イザ44:24), 永遠性(詩篇90:2), 創造の神(創世1:1, 詩篇33:6), 無限性(1列8:27, エレ23:24), 遍在性(詩篇139:7~12), 全知性(イザ46:10), 全能性(創世17:1, イザ45:11~13), 自然を支える神(ネヘ9:6)。

も一神教とは相容れない。「近い」どころか一神教とは遠い存在である。政治形態こそ違っても、こういった独裁政治国家は、過去いくつも見られる。古代では、セレウコス王朝のアンティオコス・エピファネス<sup>(11)</sup>、ローマ帝政のある時期、例えばディオクレティアヌス帝、現代ではヒトラーやスターリン等など。これらは tyrant であっても一神教の神ではない。金日成、金正日父子は、自分たちを「首領様」、「將軍様」（正式には総書記）と呼ばせても、無神論に立つ社会主義国家である以上、決して神とは呼ばせてはいない。

同様のことが次の文章についても言える。「明治以後、いわば一神教の国をつくらうとして悲劇を招いた」とある。「いわば」とは「言ってみるならば」という意味であり、明治以後日本の政府は、一神教の国をつくらうとしたのだろうか。明治政府は皇室神道を軸として天皇の神格化に努めた。天皇は現人神と呼ばれ、「神聖にして侵すべからざる」存在であった。しかし、天皇を現人神とすることは一神教ではない<sup>(12)</sup>。絶対主義的君主制と呼ぶべきものである。

1890年に渙発された「教育勅語」の冒頭には、「朕惟フニ我カ皇祖皇宗、国ヲ肇ムルコト広遠ニ」とある。「皇祖」とは天照大神を表している。天照大神こそは八百万の神の中心的存在である。古事記によれば、いざなぎの大神が、黄泉の国より戻ってみそぎはらえをし、その際に左の目を洗われたときにお成りになったのが天照大神で、右の目のときは月読の命、鼻のときには建速すさの男の命である。むしろ明治以降、日本は多神教を基盤とした天皇中心の帝国主義を築いて悲劇を招いたので

(11) エピファネスとは、「神の顕現」、すなわち「現神王」を意味した。彼は熱狂的なヘレニズムの信奉者で、エルサレム神殿にゼウス神像を導入し、ユダヤ人を迫害した。

(12) 橋爪大三郎（東工大教授）によれば、「現人神」という考えは神道の伝統にはなかった思想で、幕末から明治にかけての発明品であり、イエスの受肉に似ている。明治維新直後の政府は神道の内部にキリスト教の要素を注入したと言う。しかしそうであっても天皇制を一神教とは呼ばない。橋爪大三郎、島田裕己『日本人は宗教と戦争をどう考えるか』57頁と250頁参照。

はないだろうか。この一つの表れとして日本は植民地に神社参拝を強要した。

こんなことは百も承知で、朝日の論説委員はなぜ「一神教の国をつくらうとして」という表現を用いたのだろうか。それは第一に彼らの宗教観、特に一神教に対する認識の程度が問題なのだろうか。あるいは一神教は日本人にとってその程度のものなのだろうか。

### 3 いま必要なのは原初的な多神教の思想か

社説氏は次のように言う。「いま世界に必要なのは、すべての森や山には神が宿るといふ原初的な多神教の思想である。そう唱えているのは、哲学者の梅原猛さんだ」。

朝日新聞が、多神教、特に「原初的な多神教」を強調する背景には、多分に梅原猛の思想の影響がある。梅原猛は中村元との新春対談「こころ：日本人を語る」（朝日1990年1月8日、16日）で「宗教いかだ論」という説を提唱した。いかだは川を渡れば用がなくなり、乗り捨てればよい（これは仏典からの教え）。今一番捨てられるべき「いかだ」は、一神教であると主張した。梅原の論によると、一神教はこれまで人類の文明を発展させるのに非常に役立ったが、一神教は戦闘的あり、人間征服にパワーを発揮したが、今日の世界は、たくさんの宗教を持っている人たちが共存していかなばならない時代であるから不要である。それに対して多神教は、あっちの神もいいが、こっちの神もいいということになれば、戦闘意欲を喪失させる。それゆえ、これからは一神教を捨てて、多神教に乗り換えるべきであると言う<sup>(13)</sup>。さらに梅原は、「仏教はヒンズー教やアニミズムとともに人類の究極的な平和に貢献し、間接的に核競争の危機を和らげることに貢献すると思う」と言う<sup>(14)</sup>。

---

(13) 拙論「旧約聖書と日本の教会」『キリストと世界』8号（1998年3月）42頁参照。

(14) 「人類哲学の創造」『梅原猛著作集』17（小学館、2001年）175頁。しかし、インドとパキスタン（イスラム教）の核兵器製造競争は、インド（ヒンズー教）が先に仕掛け

梅原猛が一神教よりも多神教を選ぶもう一つの理由は、一神教は森を消失させ、自然破壊を行ってきた。それに対して、多神教、特に原初的な多神教では、動物も植物も、あるいは山や川ですら、人間と同じ霊をもっていると考える。したがって、自然を大切にし、森を守ってきた。「一神教は人間のために涙を流したが、森の植物や動物のために涙を流しはしなかったのである。それは、人間による自然征服を神の名で合理化したのである。一神教の現代におけるいちばんの問題はここにあるのである。一神教は自然の神を殺してしまった。その自然の神に、無数の植物や動物が保護されていたのである」<sup>(15)</sup>。

このように梅原は、現代人にとって最も関心の大きい「戦争」特に「核戦争」と、環境問題を宗教の問題と絡めて論じ、一神教は今日では役に立たないから捨てるべきであるという。そして朝日の社説は、この梅原理論に立脚している。

#### 4 戦争と旧約聖書

「〔文明の対立〕が語られている。背後にあるのはイスラム、ユダヤ、キリスト教など、神の絶対性を前提とする一神教の対立だ。」と社説は記す。「文明の衝突」という言葉を用いたのはハーバード大学教授サミュエル・ハンチントンである<sup>(16)</sup>。ハンチントンは文明を八つに分け、宗教は文明を規定する中心的な特徴であるとした。その上で、現在世界で起きている紛争のかなりの部分はキリスト教世界とイスラム教世界との間でなされており、ハンチントンはそれを「文明の断層線フョルト・ラインでの紛争」と呼ぶ。その上でハンチントンは、今後両者の間の紛争はさらに激しさを増すであろうと分析する<sup>(17)</sup>。この書が世に出たのは1996年であるが、不幸にし

---

たものであり、両者の間の緊張関係は最近特に高まっているのを何と見たらよいのか。

(15) 前掲書188～190頁と234頁参照。

(16) サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』集栄社、2001年。

(17) 前掲書315～322頁。しかし長期的な彼の予測は受け入れがたいものがある。桜井園郎「イスラームから考える宗教と国家」『基督神学』15号（2003）32～34頁参照。

て彼の予想は2001年に入って部分的には的中した。世界を震駭させた9・11同時多発テロをきっかけにして両者の戦いは激しさを増している<sup>(18)</sup>。部分的にと書いたのは、アフガニスタンでの戦いも、イラク戦争もキリスト教対イスラムの戦いではない。アフガニスタンではテロ組織撲滅のための戦いであり、イラク戦争はフセイン政権を打倒するための戦いであった。(その判断の是非はここでの論議の対象ではない。)イラク戦争にはイスラム国家の軍隊も参加している。他方、キリスト教圏の国家、フランス、ドイツ、ロシアは戦争に反対し、参加も全面的には協力もしていない。

この項では、「神の絶対性を前提とする一神教」の思想の根であり、幹の部分である旧約聖書、その旧約聖書の戦争観について考察してみたい。山折哲雄が記しているように(注3参照)湾岸戦争時や9・11の同時多発テロ、そしてイラク戦争においても、両ブッシュ大統領父子は、それぞれ旧約聖書から引用して国民や兵士を鼓舞した。さらにはベトナム戦争、第二次世界大戦、アメリカ・インディアンとの戦い、南北戦争、そして十字軍においても、正義の戦争、聖戦が主張され、その根拠として旧約聖書が必ずといってよいほど引き合いに出された。このことが特に多くの日本人に旧約聖書の神に対する不信感を膨らませているように思われる。

旧約聖書が西欧のキリスト教国において、このような用いられ方をしてきたことは歴史的事実である。しかし、このような旧約聖書の用い方は、神が聖書を通して示そうとされていることなのだろうか。それに対する反省の意味をこめて、この問題について少しばかり考え論述してみたい。

旧約聖書の大きなテーマの一つは、創造主である神ヤハウエがアブラハムに対して、その子孫を特別な民とし、カナン之地を永遠に与えると

---

(18) ハンチントンの予想がすべて正しいわけではない。同意できないいくつかの事柄もある。しかし、それはここでの問題ではない。



約束したことから始まる。しかしその子孫は、エジプトで奴隷として苦しむようになった。神はその民をアブラハムとの契約に基づいてエジプトから救い出し、約束の地（カナン）の地）を与えることになる。旧約聖書には、その土地の取得と喪失をめぐって三つの戦いの型が示されている。それが旧約聖書を貫いている重要なテーマでもある。そこでこの三つの主要な戦争のテーマと、そこに示されているメッセージについて考えてみたい。

(1) 出エジプトの出来事とそれに伴う戦い。神ヤハウエが先に立って戦う型。

出エジプトの出来事とは、神がモーセを指導者として立て、エジプトを脱出させて自由の民とした出来事である。その際、総指揮官であるモーセが持っていたものは杖一本であった。民は奴隷であったから当然、非戦闘員が大部分で、戦闘のための武器は持っていなかった。神はエジプトに数々の災厄を与え、最後に初子へのさばきと過越しの奇跡をもってエジプト脱出を成功させた。追跡するエジプトの軍隊を殲滅させたのは、神ヤハウエの力であった。闘ったのは、神ヤハウエであった。

「神は、そこでは、イスラエル人の出エジプトの壮挙に、直接参与されたといわれており、また、神はその出来事を通して、実際、神の存在と力を示されたのであった」（クレイギ）<sup>(19)</sup>。ここで強調されていることは「主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない」ということである（出エ14：14）。神は人類の歴史の出来事の中に、戦士としての神を啓示されたのである。

(2) イスラエルのカナン征服時における戦争の型。

約束の地、カナン征服過程においては、出エジプトの場合と異なり、現実には敵を向こうにまわして戦ったのはイスラエルの民であった。但し、その戦いにおいても神の命令と律法に従うことが要求され（ヨシ1：7

(19) ピーター・C・クレイギ『聖書と戦争—旧約聖書における戦争の問題』（すぐ書房、1990年）54～55頁。

～9), それに従ったとき, 勝利が与えられた。ある場合には敵を滅ぼし尽くすことが命令されている。「あなたがこれを打つとき, あなたは彼らを聖絶しなければならない……容赦してはならない」(申命7:2)。

現代人が一キリスト者も含めて一旧約聖書を読むときに当惑する事柄の一つは, 神がイスラエルの敵を「聖絶せよ」(新改訳)「滅ぼし尽くせ」(新共同訳)(ヘーレム)と命令されていることである。この命令の下にイスラエルの民は攻略においてカナンの人や戦利品を聖絶し(ヨシ6:17, 8:26, 11:11), その命令に反した場合, 神の怒りが下った(ヨシ7:1, Iサム15:18~19)。神ヤハウエはなぜこのような無慈悲な命令を下すのであろうか。このことが多くの人たちの疑問であると同時に, 旧約聖書の神が好戦的であると理解される理由となっている。

ノーマン・スネイスによれば, ヘーレムは, ヘブル人がカナンに入ってきたときに一緒に持ってきたものであり, それは聖(qodesh)との間に相関関係があり, その本来の意味は「拒否する, 禁じる」という意味を持つ。ヘブル語において「ヘーレム」は, ヤハウエ以外の神に聖(qodesh)であったものは, 無慈悲に破壊されて, ヤハウエに「ささげられる」<sup>(20)</sup>ものに言及するようになった<sup>(21)</sup>。これと同じ用例で, 逆な立場のものが「モアブ石」に見出される<sup>(22)</sup>。

「私は……それ〔ネボ〕を攻略し, その全ての人々, 7千人の男子, 少年, 女子, 少女, 女召使を殺した。それをアシュタル・ケモシュのために聖絶したのである」(第16~17行)<sup>(23)</sup>。

---

(20) “devoted thing,” “devoted object,” “ban”. B.D.B., *Hebrew and English Lexicon of the Bible* (Associated Pub., 1981), p. 356; *The Dictionary of Classical Hebrew*. Vol. 3 (Sheffield Academic Press, 1996), p. 319. 口語訳は次の箇所を「奉納」または「奉納物」と訳している。レビ27:21, 28, 民数18:14. ヨシ6:17, 18, 7:1, 11, I歴2:7. 新改訳ではこれをすべて「聖絶」に統一した。

(21) N. H. スネイス『旧約聖書の特質』(日本基督教団出版部, 1964年)43頁。

(22) メシャ碑文とも呼ばれ, 1868年死海東方20キロのディーバーンで発見された碑文。

(23) J. B. Pritchard (ed.) *The Ancient Near East* Vol. 1 (Princeton Univ., 1973), p. 210.

モアブの王メシヤは、イスラエルの民7千人をヤハウエに属するものとして聖絶（虐殺）したのである。すなわち、ヤハウエに聖であったものは、他の神（この場合ケモシ）にはヘーレムであった。逆に、他の神に聖であったものは、ヤハウエにはヘーレムであった。したがって、ある神の信奉者は、他の神の所有物から奪い取ることのできるすべて——それが生命のあるものであれ、ないものであれ——を破壊し尽くしたのである<sup>(24)</sup>。このように、ヘーレムの思想自体は当時のカナン在地において行われていた事柄であって必ずしもイスラエル独特のものではない。

他方、カナン侵入時における戦いは、偶像礼拝に浸り、道徳的に墮落し、神の民に立ち向かう者たちへの神の裁き（申命7：10，9：4～5，レビ18：24～25参照）という面があることを旧約聖書は記している（キドナー）。遠藤嘉信はこのキドナーの説を引用しつつ「こうした異教徒に対する〔神のさばき〕と〔聖絶〕という行為等の現実は……律法で禁じられている〔忌むべき〕行為を行う者は、たとえそれが律法（十戒）を直接に与えられていない民であろうと、契約の民と同様に、神の御性質の現われであるこの律法を基準として裁かれた」のであると言う<sup>(25)</sup>。

このような聖絶や戦争の思想は、当時のカナンまたは古代オリエントの世界の状況の中で、神がその主権性のもとで、審判と贖いを目的として用いられたことであって<sup>(26)</sup>、それ自体は邪悪で人間的な活動の一形式である<sup>(27)</sup>。今日許される事柄ではないし、また今日の戦争に適應することはできない。なぜなら、この戦争はイスラエルにとって約束の地、カナン取得という出来事についてだけ許された事柄であるからである。

(24) スネイス『旧約聖書の特質』42～45頁参照。

(25) 遠藤嘉信「十戒における〔殺してはならない〕の意味」『日本福音主義神学』27（1996年12月）35～37頁。

(26) 神が当時のオリエントの習慣を用いたことは、例えば契約の方法にその時代の習慣を取り入れたことによっても理解できる。拙著『旧約聖書の思想と概説』上71頁参照。

(27) クレイギ『聖書と戦争』79頁。

(3) 契約に違反したイスラエルの民に対する神の裁きとしての戦争の型。(滅亡と捕囚)

カナンを占領し、ダビデの時代に統一王国を築き上げたイスラエルの民は、ソロモン王の子レハブアムの時代に南北王朝に分裂し、その二つの国家は次第に神から離反し、罪を犯し、やがて軍事大国のアッシリア、バビロニアによってそれぞれ滅ぼされた。

列王記の記者は次のように記す。「こうなったのは、イスラエルの人々が……彼らの神、主に対して罪を犯し、ほかの神々を恐れ、主がイスラエルの人々の前から追い払われた異邦人の風習……に従って歩んだからである」(Ⅱ列王17：7～8)。

「エルサレムとユダにこのようなことが起こったのは、主の怒りによるもので、ついに主は彼らを御前から投げ捨てられたのである」(24：20)。

そのことは、カナン侵入前にモーセを通して予告、警告されていた事柄であった<sup>(28)</sup>。預言者たちのメッセージは、イスラエルの罪、契約違反、不義を取り扱うものであった(アモ5：24, イザ1：4参照)。

しかし、イスラエルは、預言者たちの勧告にも耳を傾けず罪を犯しつづけ、ついに破局を迎えることとなった。この場合、神がとった方法は異邦人の軍隊を用いて南北イスラエル両国に対して裁きを与える(シャファット)<sup>(29)</sup>ことであった。

クレイギは次のように言う。「選びの民のこうむった軍事的敗北でもっとも悲劇的だったことの一つは、敗北がみずからのかつて行なった征服を裏返しにした形をとったところにある。」<sup>(30)</sup>カナン征服の目的とされた

---

(28) 申命6：14～15, 11：16～17, 28章～29章参照。

(29) 「シャファット」とはもともと法、律法をもって裁く、判決するという意味であった。士師(シヨフェット)は「さばきつかさ」とも呼ばれた。王も法をもってさばく者であった(Ⅱサム15：2～3)。イスラエルが契約を破ったとき、神はイスラエルをさばくということが繰り返し預言者の口から語られている。エレ2：35, エゼ7：3, 18：30, 21：30, 23：24。

(30) クレイギ『聖書と戦争』122頁。

ことの一つは、その地に居住していたカナン人に対し、その悪行に報いて神の審判を下すことであった。ところがいまや、イスラエル人も神との契約違反と不義、不道德のゆえに、嗣業の地を失うことになった。

神はご自身の選びの民であっても、契約に違反し、不正を行うことをやめないならば、神を信じない異邦の国家を用いてでも愛する民に刑罰を与えられる（アモ5：27、イザ5：25,26,30参照）。

ユダヤ人のように自国の民が、自分たちを選民として選んだ神によって裁きを受けて、国家が減じたことを明言し、それを決して変更することのない正典の中に書き記し、自分たちにとって都合がよくても悪くても、2千数百年にわたって経典として守り続けた民は世界にその例を見ない。この点をしっかり理解しておく必要がある。さらに聖書の記者は、尊敬する族長や名君の恥ずべき罪をも明記し、それに対する神のお取り扱いも記している。

しかし同時に、神は罰を与えるために用いた異教国家をも、その罪に応じて裁きを与えるのである。預言者のメッセージにはそのことも語られている<sup>(31)</sup>。神ヤハウエは全世界を裁く方である（創世18：25、詩篇7：8）。この旧約聖書の歴史観を現代に当てはめることが許されるなら、キリスト教国であっても、またその国の指導者が旧約聖書のことばを用いて、戦争遂行のための大義名分を得たとしても、神の目からご覧になって真の正義が見出さなければ、神はやがてその国を摂理の中で裁かれるだろう。その場合、神は、異教の国家を用いても裁きをなさるこ

---

(31) ナホム書はニネベ（アッシリヤ）に対するさばきの宣告、エレミヤ51章は、メディア人によるバビロニアに対する刑罰の宣告が記されている。北王国を滅ぼしたアッシリヤはバビロニアによって滅ぼされ（前612年）、そのバビロニア帝国は、前539年ベルシャ軍によって滅ぼされた。バビロニアは、ユダの民を70年間捕囚の民として拘束していた間だけ帝国として当時のオリент世界に君臨することを許されたとも解釈することができる。拙著『わかりやすい旧約聖書の思想と概説』中巻（いのちのことば社、2002年）216～219頁。W. ティンマリ『旧約聖書の世界観』（教文館、1990年）106～133頁参照。

とがありうるのである。聖書の神は創造主であると同時に、個人の生活に関心をもたれ、国家や、世界の歴史をも支配する方である。

#### (4) 新しい契約における戦い

他方、神の裁きとしての南王国ユダが滅亡するという事態は、同時に新しい時代の到来をも意味していた。エルサレム陥落を目前にして、エレミヤは「新しい契約」について預言した。

「その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ……彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ——主の御告げ。——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」(エレ31：31,33)。

古い契約は民族国家が形づくられるという外的な形式を取っていたのに対して、新しい契約は、人間の心の中に神が内側から働きかけてくださる、という点を特徴としていた<sup>(32)</sup>。

イエスは十字架にかかる前夜、弟子たちと共にとられた過ぎ越しの食事において、この新しい契約について語っている。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です」(ルカ22：20)。エレミヤより何世代か後の捕囚後の預言者ゼカリヤは、やがて来るべき王は子ろばに乗って入城される柔和で平和を与える王である、と預言した(ゼカ9：9～10)。王は騎馬に引かれた豪勢な馬車に乗って都に入城するのが一般的であるが、しかしやがて来るべき王は、見栄えのしない子ろばに乗ってくるというのである。このこともイエスのエルサレム入城において成就した(マタ21：4～5)。このことは、何を意味するのだろうか。神は、旧約聖書に記されたような、聖絶を伴った戦争や殺戮ではなく、平和をご自身の民に求められることを意味している。

旧約聖書において戦争は、イスラエル民族と土地取得との関係でなされている。他方、新約聖書では、神の国は終末論的王国である。しかも

(32) クレイギ『聖書と戦争』125頁。

それは民族や国家を越えた教えである。したがって、旧約聖書に記されている戦争における神の命令を、現代にあてはめて適用するのは適切ではない。今日では、神が命じる聖戦はありえない<sup>(33)</sup>。旧約聖書の戦争が私たちに教えてくれるものは、イスラエルの苦い歴史の教訓と、その結果与えられた新約聖書のキリストの十字架の教えである。新約聖書に記された「戦い」は心の中の戦い（ロマ7：23）、悪魔との戦い（エペ6：11～18）、信仰の戦い（Iテモ6：12）である。新約時代における「聖絶」とは、罪との戦いであり、神の民として聖別された者となることである。

## 5 森と一神教と旧約聖書

「いま世界に必要なのは、すべての森や山には神が宿るという原初的な多神教の思想である」と、社説は主張する。確かに世界から森林が消失しつつあることは、21世紀、人類の生存に極めて深刻な影響を与えかねない問題を提起している。前述したように、梅原猛は、一神教は自然を征服し、森を消失させるのに大きな力を発揮したと言う。

さらに、安田喜憲は次のように言う。「一神教のもとで、自然は人間に食物を提供する位置にあまじなければならなくなった。その世界観は神の下に人間を、そして人間の下に自然をおくという自然征服型の人間中心主義に立脚していた。」<sup>(34)</sup>

ヨーロッパは、かつては深いブナやナラの森におおわれていた。しか

---

(33) クレイギの次のことばは私たちに大変重要な示唆を与えてくれる。「キリスト教の歴史の悲劇は、しばしば、戦いの敗北から旧約聖書が導き出している教訓を忘れてしまったことに起因する。キリスト教の歴史において、神の国の概念は、繰り返し民族国家と混同され、保持されてきた。」クレイギ『聖書と戦争』129頁。「聖戦」については、W. Kaiser, *Toward Old Testament Ethics* (Academie Books, 1983), pp. 172-180; 佐々木哲雄「旧約聖書の戦争に関する研究小史」『福音主義神学』27（1996年12月）5～29頁；平野節雄「旧約聖書における〔戦争〕の理解をめぐる」『基督教研究』第38巻（1974年）58～78頁参照。

(34) 安田喜憲「森と文明」『講座・文明と環境』第9巻（朝倉書店、1996年）5頁。

し12世紀以降の大開墾によって、森は急速に失われていった。

「この森の破壊の先頭に立ったのはキリスト教の宣教師たちだった。森のなかにいたケルト人やゲルマン人の伝統的なアニミズムの神々を排斥し、聖なる森を破壊し、聖木を切り倒していった。」<sup>(35)</sup> 15世紀には、北西ヨーロッパの森は激しく破壊され、農耕地や牧草地が拡大した。かてて加えて、この時代、小氷期と呼ばれる気候悪化のため、人々はヨーロッパの大地を捨て、新天地を求め、アフリカ大陸、アジア大陸、新大陸アメリカへと渡り、アニミズムの文明が、次々と人間中心の森林破壊の文明の餌食となっていった。しかも、新大陸の開発と開墾のため、「アフリカの黒人を奴隷として売り渡すことさえした」<sup>(36)</sup>。

こういった安田氏の論点はある程度当を得ている。キリスト教徒が過去において多くの間違いを犯してきたことは事実として認めなければならない。アフリカの黒人を新大陸に売り渡したのは、言い逃れの出来ない恥辱の歴史であるし<sup>(37)</sup>、長年にわたるユダヤ人迫害、世界の各地に植民地を広げ、無実な人々を虐殺し、人民から搾取してきたことも正しいことではない。20世紀になって、神は、戦争という惨事を通してこの植民地問題を是正され<sup>(38)</sup>、多くの独立国家がアジアやアフリカに誕生した。宗教と科学の論争も宗教裁判も、今となっては過去の歴史の産物として、また反省すべき出来事として受け止められている。

ヨーロッパ大陸においてかつて繁茂していた多くの森が消失したのは事実であり、キリスト教徒が森の多くを伐採することも事実である。では、果たして森の消失は、一神教という宗教のゆえのことだろうか。環境問題は筆者の専門分野ではないが、しかし答えは否だと思う。そのうちのいくつかの理由を挙げてみたい。

---

(35) 前掲書6頁。

(36) 前掲書7頁。

(37) もっとも奴隷制度を廃止させたのも、英国の熱心なキリスト教徒であったウイルバー・フォースや米国のリンカーンであった。

(38) それも広い意味で神のさばき（ミシュパット）である。



## (1) レバノンの森

旧約聖書には、ソロモンが神殿と宮殿を建設するにあたってレバノンから杉を大量に輸入し、それを建材として用いたことが記されている（I列王5章）。香柏と呼ばれるレバノン杉は、ソロモンの神殿建設だけでなく、古代中東における最も重要で貴重な建築資材であった。各民族の神殿の建築材を始めとして、船のマストや、商船や艦船をつくるためにもなくてはならない建材であった。フェニキア人は豊富なレバノン杉を背景として巨万の富を築いた。レバノン杉は、レバノン山脈だけでなく、エブラ王国（現シリア）のアスサリエ山、ヒッタイト王国（現トルコ）のアマノス山、トロス山脈にまで分布していたことが最近の調査で分かってきている。しかし、現在、レバノン杉はどこにも存在していない<sup>(39)</sup>。この森はどのようにして消失したのだろうか。

レバノン杉に関する文献は人類最古の叙事詩の一つであるギルガメシュ叙事詩に見出される。ウルクの王ギルガメシュはウルクの町を立派にし、神殿を建てるために、エンキドゥと共に千五百キロ近い道<sup>(40)</sup>を三日で歩いて巨大な杉が生える森に到着した。そこでギルガメシュが森の神フンババを殺害する<sup>(41)</sup>。メソポタミアの低地はもともと森が少ない。しかし、都市をつくり神殿を建てるためには材木が必要であった。ギルガメシュはその木材を求めてはるばる1500キロ近い道を歩み、レバノン杉を手に入れるのである。森の神を殺すということは、神聖と信じられていた森を人間が征服したことを意味する。人間はこのときを境として、自然を破壊・征服する文明を擁立したと解釈できるという<sup>(42)</sup>。紀元前

(39) 安田喜憲「森と文明」36頁。

(40) 「50ペールを彼らは終日歩み進んだ。1月と15日を彼らは三日で行ってしまった」  
「ギルガメシュ叙事詩」4：1。1ペールは約10キロ。彼らは50ペール（500キロ）を  
1日で歩み、それを3日つづけたことになる。『古代オリエント集』『筑摩世界文学大  
系』1（筑摩書房、昭和53年）147頁。

(41) 「ギルガメシュ叙事詩」第4，5書版。

(42) 安田喜憲「森と文明」34頁。

2250年、木材不足に悩むアッカド王国のナラム・シン王がエブラ王国を攻略し、地中海沿岸の巨大な森林資源を獲得した。彼らはその木材を陸路ユーフラテス河まで運び、そこから筏を組んでメソポタミアの低地の町々まで千数百キロの距離を運んだのである。

レバノン杉を利用したのはメソポタミアの諸王国だけではない。エジプトもまた大量の消費国であった。森の少ないエジプトでは、建築材や土木用材の大半をレバノン杉に依存していた。クフ王のピラミッドのそばから発見された太陽の船もすべてレバノン杉できていたし、ツタンカーメン王の棺は、レバノン杉で作った巨大な三重の厨子のなかに入っていた<sup>(43)</sup>。その他、新王国時代に作られた巨大な大量の木棺の大半はレバノン杉が用いられている。このようにレバノン杉は、古代オリエントの文明をささえるのに大きな役割を果たしたが、多神教民族の乱伐によって今日跡形もなく消え去っている。

## (2) ギリシャとクレタ島の森

今日ギリシャを訪れる人々は、山に木がないことに気がつく。しかしギリシャ文明が栄えた当時は、ギリシャは森に恵まれていたことが最近の研究によって分かってきた。森が消失したのは、ギリシャ文明の最盛期である。ミケーネの森が消失したのはトロイア戦争の頃の紀元前13世紀頃であり、アテネの森が消失したのは、アテネで哲学や芸術が花を咲かせた紀元前5世紀頃であるという<sup>(44)</sup>。なぜこのようにギリシャから森が消失したのか。その第1は乱伐であり、その後、植林を怠ったこと。第2はこの地方の気候風土が関係している。ギリシャは地中海性気候で夏は乾季で、冬雨が降る。夏の強い日光と乾燥のため山火事を起こす度合いが日本よりも遥かに多い。度重なる山火事は森の蘇生力を奪ってしまう。第3にそれに追い討ちをかけるのが羊や山羊を放牧する習慣である。羊は山の木の芽を食べてしまい、植林の敵である。このような条件

---

(43) 安田喜憲「地中海文明の興亡と森林破壊」38頁。

(44) 前掲書43～44頁。梅原猛『人類哲学の創造』53頁。

のもと、かつては緑豊かであったギリシャの山々は、肥沃な表土が流出し、石灰岩が風化した土壤が顔を出す痩せた地となった。

同じことが、ギリシャ文化よりも前に栄えたクレタ島のミノア文化についても言える。クレタ島にもかつては豊かな緑と樹木が豊富にあったことが知られている。しかし、人口増加に伴う農耕地や牧草地の拡大と、宮殿や船舶の建造のために森の木の乱伐が行われ、森が消失し、同時に文明も終わりを告げたのである<sup>(45)</sup>。このように、地中海沿岸地方から森が消失したのはキリスト教徒が出現するよりも前の出来事である。

### (3) 中国の森

世界四大文明の発祥地の一つ中国大陸はどうであろうか。中国もかつては豊かな森林が国土のかなりの部分を覆っていたと考えられている。しかしこれらの森の多くは今日残存していない。

中国で大量の樹木が伐採されるようになったのは、新石器時代末期からで、それは主に墓を作るために用いられた。この墓は木槨墓と呼ばれるもので、木材を柱状、または板状に加工して、土中深くに埋め、棺をおおう家をつくったもので、その習慣はほぼ全国に見られる。この木槨墓は大量の木材を消費し<sup>(46)</sup>、そのための木材の伐採は広範囲の森林伐採を呼び、その跡地には肥沃な農地が広がった。信大農学部教授、菅原聡の調査によれば、中国大陸で繰り返された王朝の興亡と、森林開発とはきわめて深い関係にあり、その森林伐開の始めは、木槨墓のための伐採から始まると言う<sup>(47)</sup>。その跡地には肥沃な農地が広がり、そこに都市が出来、高度の文明が発展し、それが人口増加を生み、死者の増加をも生み出し、さらに森林伐開が繰り返されると言う。このため漢王朝の直接

(45) 前掲書40～43頁。

(46) 例えば桜蘭盆地の新石器時代のロブノール人の墓は、地表に直径50～200mもの円形を区画し、ここに木柱をすき間なく埋める。一基の築墓に費やされる木材量は想像をこえる。菅原聡「中国大陸の森林破壊と木槨墓造営」『森と文明』52頁。

(47) 前掲書48～59頁参照。

支配域では樹木が伐採され続けられ、現在では、高山深谷でわずかに自然保護区として保護されている以外には、森林はなくなってしまった。内蒙古自治区と、寧夏回族自治区の間にある賀蘭山系には、現在一木一草ないという表現がびったりする岩山であるが、漢代から唐代までは豊かな森林資源に恵まれた地域であった。しかし、12世紀の西夏のときに大量の木材が伐りだされ、明代にも長城建設のために大量の木材が伐りだされ、その後は、おもに羊の放牧地となり、その後急激な流入人口があり、現在では草地さえもがなくなり、荒漠な山と化している<sup>(48)</sup>。これは中国が多神教であった時代の出来事である。

ヨーロッパ大陸と中国大陸では、現在どちらが多く森林を保存しているだろうか。森林が地球の大地から消えていったのは、一神教のせいというよりは、多神教、一神教を問わず、文明の発生と人間の勝手きままな森林伐採によるものである。

#### (4) 旧約聖書と森と環境問題

創世記には次のようなことばがある。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ」(1:28)。

ここで「支配せよ」と言われていることは、被造物の一つ一つが、本来の目的を果たし得るように治めることを表しているのであって<sup>(49)</sup>、森林を乱伐したり、動植物を乱獲することが許されているわけではない<sup>(50)</sup>。それは暴君のなす悪政であって、正しく支配し、治めよとの命令に違反した行為である。それは墮落した人間の勝手気ままな行為である<sup>(51)</sup>。その点において近代の西欧型文明、アメリカの大量消費文明は、自然破壊という大きな間違いを犯している<sup>(52)</sup>。それは旧新約聖書の思想ではない

(48) 前掲書59～61頁。

(49) 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約』1 (いのちのことば社, 1985年) 82頁。

(50) G. J. Wenham *Genesis 1-15* (Word Biblical Commentary; Word, 1991), p. 33.

(51) H. G. Stigers, *A Commentary on Genesis* (Zondervan, 1978), p. 62.

(52) 日本の国が他国に比べて森を保存してきたことは誇るべきことである。日本の気候

し、上記の神のことが示していることでもない。旧約聖書には森の神を殺せという言葉はない。逆にレバノンの杉、森の素晴らしさを称える文章すらある（エゼ31章）<sup>(53)</sup>。私たちは日本古来の循環型の生活様式に学ぶ必要が多くあり、原初的な多神教徒であった私たちの先祖が行ってきた循環型エコロジーの生活から学ぶ事は多いかもしれない。しかし、そのことが一足飛びに原初的な多神教に宗旨替えする理由にはならないのではないか。同時に旧約聖書が記す、神が人間に自然を支配せよと言われた言葉をも正しく理解する必要があるのではないか。

## 6 新たな「八百万の神」とキリスト教

「日本こそ新たな〔八百万の神〕の精神を発揮すべきではないか」と、社説氏は言う。

「新たな八百万の神」とは何だろうか。文脈から考えると、『千と千尋の神隠し』に出てくる、湯屋に疲れを癒しに出てくる八百万の神なのだろうか。そこでは千尋の優しさに触れて、化け物たちが弱さや寂しさを引き出される。世界には沢山の矛盾と悲哀に満ちた妖怪がはびこっている。これらを力や憎悪だけで押さえるのではなく、愛の精神で立ち向かわなければならない。「むき出しの欲望が渦巻く湯屋にあって、千尋はひとり果敢に、しかし優しく彼らと向き合う」。主人公の姿勢の土台となっているのは普遍的な「愛」であり、それがこの作品のメッセージである。

---

風土が多雨多湿であったこと、縄文人が羊を持ち込まず、蛋白質を海の幸に求めたこと、徳川幕府を始めとして、人々が森林を大切にしたことなど、いくつかの好条件と努力が幸いしたのである。そこには、森の神を大切にしたいという多神教的要素もあったかもしれないが、それがすべてではない。現代の日本はアメリカ的消費文明の先頭的な位置にあって、より快適な生活をするために東南アジアの国々の森を乱伐し、多くの木材を消費し続けてきたのではないだろうか。そのため熱帯雨林の減少が問題となっている。最近はその問題に気がついて、日本の会社も伐採した跡地に植林をするようになってきたことは喜ばしいことである。

(53) 但しこの章は、アッシリヤがレバノンの杉のように繁栄し、高慢を起こしたので、打ち倒されるという比喩として用いられているが。

これが社説が主張する「新たな八百万の神」の精神なのだろうか。

「愛」や「優しさ」を基調とした教育、政治、外交努力<sup>(54)</sup>、大いに賛成である<sup>(55)</sup>。しかし例えば、教育の領域をとってもみても、その愛の精神は、何の教えを基本にして与えることができるのだろうか。宮崎駿のアニメの素晴らしさを認めるのにやぶさかではないが、それが日本国民の教えの基本となることができるのだろうか。今日多くの日本の若者の心は荒れ、大学に入ったけれども、学ぶ目的、生きる目的を見出せない学生が大勢いる<sup>(56)</sup>。

1998年12月30日の朝日の社説は大変印象的であった。タイトルは「しょせんはこんなもの」。そこにはこう記されていた。「不良債権の巨大な氷山が、二つの長期信用銀行を難破させた。きわめつきは何十兆円という予算のバラマキだ。ウソがウソを膨らませた。マネーの敗戦ばかりか心の敗戦だ……モノもココロも敗れた」と記している。筆者はこの社説に好感をもった。そこから新たな出発をすれば、バブルの崩壊も決して無駄にはならず、やがて日本に大きな益をもたらすはずであると思った。しかし、それから4年後の2003年元旦の社説ではその態度が一変し、一神教の立場を排し、新たな八百万の神の精神を発揮して行こうと勧める。日本は古来多神教の国であったし、それが生活の中に根付いているのであるから、多神教を勧めるのはごく自然なことかもしれない。しかし、このことも考えていただきたい。

明治以後、日本政府は次々と獲得した植民地において神社を拝むことを奨励し、第二次世界大戦が始まると、八紘一宇のスローガンのもと、天皇崇拝と日本の神々への礼拝を強要した。しかし神社参拝の教えは今

---

(54) 憲法第9条にある「武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」という一文は、この思想を土台としている。

(55) 古森義久（産経新聞記者）はこの点について、「では軍事力なしに不安定要因に対処せよというのか」と朝日を論難する。『国の壊れる音を聴け』312～3頁。

(56) 筆者の友人のある有名大学の教授は、現代の多くの学生の心が病んでいると嘆いていた。

日どこかの国に根付いだろうか。日本が戦に負けたと同時に、強制的に行った宗教のプロパガンダは終わりを告げた。

他方、キリスト教は、日本よりも遥かに小さなユダヤの国で発生した。ユダヤの国はローマ帝国によって滅ぼされ、民族は離散したが、そこから発生したキリスト教は、迫害を受けながらも自分たちを征服したローマ帝国の広大な領土とヨーロッパへと浸透していった。そして人々に希望、喜び、生きる力を与え、ついに皇帝までが改宗するに至った<sup>(57)</sup>。さらにいくつかの問題があったにせよ、その教えは世界中へ広がっていった。なぜそうなったのか。そこにはすべての民族が受け入れることができる普遍性と「救い」があったからである。その教えが福音と呼ばれるゆえんである。さらに、そこには一貫した人生観、世界観があった。イスラム教が短期間に中東やアフリカの民族に広がっていったのも、ある種の普遍性と救いがあるからである。単に「右手に剣、左手にコーラン」というかつて教科書に記されていた図式だけではないということが最近言われている。そのことは仏教についても言える。

これに対して、日本の神社や八百万の神が、植民地の人々によって受け入れられなかったのは、日帝の横暴な政策に対する憎しみと同時に、その宗教が他国の民に受け入れられるような普遍性がなかったからではないか。これが仏教や儒教であったなら違った結果をもたらしたかもしれない。しかし、仏教も儒教もすでにそれらの国に存在していた。八百万の神の信仰は、日本の土壌の上に立った信仰形態であり、仏教と共に日本特有の文化を作り出す要因となった。しかし、政治も経済も人々の交流もグローバル化され、しかも日本の経済は世界と深く結びついている現状で、一神教の教えを排し、八百万の神への信仰を前面に出すような風潮を作り出すことは、過去において日本が歩んだ道をもう一度たどるような気配がして不安に駆られる。

---

(57) キリスト教がローマの国教になったとき、いくつかの弊害が生じた。それは仏教や神道が権力の側に立ったのと同じである。

今日、恐ろしいテロを世界各地で起こす者がイスラム原理主義者であり、それに対する報復と懲罰をこめて、多くの民間人を巻き込む戦争を起こしている超大国がある。アメリカの大統領と国民が、キリスト教信者であることのゆえに一神教は危険であると言う。この発想はあまりにも短絡である。なぜなら、アメリカの中にも反対者は大勢いるし、イラク戦争に真っ向から反対したのもキリスト教世界に属する国である。永世中立国という世界にさきがけて平和を大切にしたのもキリスト教国である。

もしこのような論法を用いるならば明治以後、中国、朝鮮（秀吉の時代にも）、東南アジアを侵略し、植民地をつくり、残忍な殺戮を繰り返した日本人が神道を信じる者だから、神道は残忍で危険だと結論づけるようなものである。

部族間、国家間の残忍な戦争は人間が持つ罪性によるものであって、人類の歴史を展望すれば多神教徒、一神教徒を問わず絶えず繰り返さされてきたものである。人類の歴史は戦争の歴史でもある。そしてその戦いは、大量破壊兵器を人類が所有するようになって、地球規模の破壊へと突き進む危険をはらんでいる。それは相手方の宗教が悪いといって非難しあって解決するような問題ではない。むしろ宗教を戦争に利用しようとしていることに問題があるのではないか。もっと冷静な心で聖書を読み、聖書の思想を理解して欲しいと願う。

「厳しい国際環境はしっかりと見据える。同時に、複眼的な冷静さと柔軟さを忘れない。危機の年にあたり、私たちが心すべきことはそれである」と、社説はその最後を結ぶ。賛成である。筆者はこの言葉を朝日新聞論説委員の方々にお返ししたい。ナショナリズムに走るのではなく、複眼的な冷静さと柔軟さを忘れないでいただきたい。

(非常勤講師 旧約聖書学専攻)